



Senmatsu Shinya



Matsuura Yukiko



Oka Teruki

巻頭●鼎談

京都の千松信也さんの作業場にて
Photo by Godo Keiko

猟師からみた人と森と獣の距離

千松 信也 猟師

✕ 松浦 友紀子 北海道支所主任研究員
岡 輝樹 四国支所長

京都の山で、自給のための「くくり^{わな}罠」猟をつづけている千松信也さんと、エゾシカの研究を行う傍ら、ハンターでもある松浦友紀子主任研究員、野生動物と森林と人間の適正な関係を研究する岡輝樹四国支所長に狩猟・野生動物の管理・山の恵みをめぐって、お話をいただきました。

岡●千松さんが狩猟を始めることになった、そもそものきっかけからお聞かせ下さい。

千松●たいいていの猟師は、親族が猟をしていたからという人が多いと思いますが、僕の場合はもともと動物と関わる暮らしや営みが好きで狩猟への憧れもあったんです。それで、大学の頃に京都に越してきて、たまたまアルバイトに行った会社の社員に罠^{わな}猟^{りやう}＊をしている人がいて、その人に教わったのが始まりです。初めは軽い気持ちでやり始めたのですが、どんどん深みにはまっていった……。

岡●深みというと？

千松●うまい肉がタダで手に入る（笑）、というのもあるし、罠^{わな}猟は動物との知恵比べみたいな面があって、それが面白いというものもあります。動物の痕跡を調べたり、おなじ目線で動物と向き合う感覚が楽しくて。生きものの命を奪う営みなので語弊^{ごへい}はありますが、山の自然の中でそうした生き方をするのが心地いいんです。

それと、当時は大学の学生寮に住んでいたのですが、まわりはみんな腹をすかせた貧乏学生ばかりで、山から丸々一頭の獣を獲^とってくると、それでもうヒーローになれる。150人くらいいましたが、原始人の村の英雄じゃないですけど、獲物を持って帰ると「うおー、肉が来たぞー」みたいな感じで放送まで流れて、みんなワラワラと集まってくる。それで解体も一緒にやりながら、その横で焚^たき火をして焼いて食うという……（笑）

松浦●野性的ですね（笑）。

千松●最初の狩猟体験としては、よかったと

千松 信也 (せんまつ しんや)

1974年兵庫県生れ。京都大学文学部在籍中に狩猟免許を取得し、先輩猟師から伝統の罾猟(くくり罾)、網罾(無双網罾)を学ぶ。現在は、運送会社で働きながら、おもに家族で食べる自給のための罾を続けている。著書に『ほくは猟師になった』(新潮社)、『自分の力で肉を獲る』(旬報社)、『けもの道の歩き方』(リトルモア)など。2018年放送のNHK番組「けもの道 京都いのちの森」から生まれた映画『僕は猟師になった』(川原愛子監督)が2020年に公開された。

しとこと 「人間に関わりを放棄した森に入ると、その環境に適応して生きている野生動物たちに出会う。罾という営みは、そんな彼らの声を聞く行為でもあるように思う。」



巻頭●対談

皮から内臓までのすべてを山の恵みとしていただくのであれば、それは基本的にポジティブな営みなんです。

思います。狩猟を始めた人の中には、獲ったはいけれど肉が余って困るとか、友だちにあげても気持ち悪がられた、という人もいます。自然の中でのびのび生きている動物の命を奪う狩猟という営みは、いいことなのか？と考えたりしたこともありましたが、獲ってきたものをみんなに喜んで食べてもらえる経験を最初にしたことがよかった。肉を食うということが家畜であれ野生動物であれ、誰かが殺した動物をみんなで分かち合っただけ。これまで自分は食べる側だったけれど、それを提供する側にまわったただなんだと納得できたことで、続けることができました。

岡 動物と真つ向勝負をして、自分の手で糧を得るところが、猟師の魅力でもあるのでしょうか。

千松 罾罾って獲物との距離が近いんですよ。銃罾だと離れたところから撃つじゃないですか。罾罾の場合は、すぐ近くで生きている動物を直接ナイフで突いたりしないといけないので、よけいにそういう真つ向勝負というイメージに近いかもしれません。

松浦 魅力を感じないと狩猟を続けることはできないですね。狩猟免許を取るように国や自治体がいかなるサポートをしている、若いハンターが増えている市町村もありますが、せっかく免許を取ってもやめてしまう人も多い。銃や罾の扱いだけ覚えても、シカの生態を知らなければ、どこでシカを獲たらいいかわからないし、狩猟の魅力を知る機会もなく、やめていくのだと思います。

岡 罾罾の数も増えてますね。動物の死に直

接向かい合う人が増えてきているようです。

松浦 狩猟なのか、有害鳥獣の捕獲なのかという目的の違いや、野生動物の生態をしつかり理解して担ってもらい必要がありますね。

岡 ところで、松浦さんがハンターになったきっかけは？

松浦 私は学生の頃に北海道の十勝に住んでいて、シカの研究をしていたんです。山里でハンターも多く、そのおじさんたちの目が生き生きしていて、罾の準備から解体、反省会という名の飲み会までの一連の流れがとても楽しそうだったんです。それがきっかけです。もちろん、シカの研究をしているのも大きかったのですが。

岡 最近、私が気になっているのは、捕獲作業で止め刺し*がかなり心理的な負担になっていることです。林業被害を減らすために、国や林業事業体の職員が自ら罾の資格免許を取って、シカを捕獲することも増えてきました。止め刺しには、銃を使う方法と電気で感電させる方法がありますが、その命を奪う瞬間が精神的な負担になるようで、しつかりとしたフォローが必要だと考えています。

松浦 私は鉄砲ですが、きちんと殺すことだけを考えます。苦しめずに一発で殺すこと。そこに余計な気持ちは入ってきません。気持ちが揺れると弾がズレて、良いところに当たらないと動物が苦しむだけです。苦しみたくないことが最優先。

岡 千松さんは、何か考えますか？

千松 止めの瞬間は必死です。相手も必死です。命を奪う時、罪悪感のようなものを感じます。



動物の痕跡

森の中を歩くと、けもの道や足跡、糞、イノシシがからだを樹木にこすりつけた痕、シカが樹木で角を研いだ痕、クマが爪で引っ掻いた痕など、さまざまな動物たちが暮らしている痕跡を見つけることができる。写真は、イノシシが、ヌタ場でからだのダニを泥で落としてから、樹木にこすりつけた痕。

*Key Words 狩猟方法と免許

罾罾は、くくり罾や箱罾など、罾を仕掛けて獲物を獲る狩猟方法。千松さんは、ワイヤーの輪の仕掛けを踏むと脚首をくくる「くくり罾」の罾と、餌をついばみに集まった鳥に狩猟者がロープを引いて網をかぶせる「無双網罾」を行っている。罾を行うには狩猟免許が必要で、「網罾」「わな罾」「第一種銃罾(装薬銃)」「第二種銃罾(空気銃)」がある。



松浦 友紀子 (まつうら ゆきこ)

1974年千葉県生れ。1997年北海道大学農学部生物資源科学科卒業、2000年東京大学農学生命科学研究科応用動物科学専攻修了、2004年北海道大学大学院獣医学研究科修了。博士(獣医学)。森林総合研究所北海道支所主任研究員。酪農学園大学特任教授。エゾシカの個体数管理や繁殖生態、衛生管理を研究。学生時代に銃を所持し、ハンター歴は20年以上。一般社団法人エゾシカ協会の専務理事として、シカ管理の担い手育成やシカ肉の普及啓発にも携わる。



「ハンターはシカが憎くて殺しているわけじゃない。むしろ誰よりもシカのことを考えているはず。だからこそ、獲ったら利用したい。」

巻頭●対談

苦しめずに1発で殺すこと。 そこに余計な気持ちは入ってきません。

感じることはありますが、そういう感情も引き受けながらやっていくのだと思います。おそらく昔の人もいろいろなことを考えて、絵に描いたり、葉っぱをくわえさせる儀式をしたり、心臓を捧げたりしたのだと思います。

岡●日本人と肉食の関わりからみると、仏教の影響による禁忌もありますが、神様から「食べても良い」という免許符をもらっていることも興味深いですね。たとえば、奈良の春日大社や千葉県の香取神宮、長野の諏訪大社などです。諏訪大社の「鹿食免」はシカを食べ得てもよいという免許符ですが、書かれている文がすごい。農作物加害動物として対峙してきた長い歴史から「シカは悪い生き物だから、人と同化することできれいにしてあげる」という考え方。

千松●獣肉食の文化圏は、人間に都合よく理由をつけますね。アイヌの人に聞いた話ですが、アイヌ民族は自然のあらゆるものを神様として崇めています。シカはほとんどの場合神様じゃないんです。いろんな動物、フクロウでもスズメでもクマでもみんな神様なのに、シカとサケは、神様が与えてくれた肉みたいなジャンルになる。一部の地域では神様としていたところもありますが、日常的によく食べる動物に、毎日毎日感謝の儀式をしていたらキリがないと思っただけじゃないかな。

松浦●ヒグマはアイヌ語でキムンカムイ(山の神)ですが、シカはユク(獲物)ですね。

岡●秋田マタギは、猟を始める前の日に神社に御神酒をあげて参拝しますね。それから現地では解体しない。獲物は必ず持って帰って

みんなの前でクマの皮を剥いだり、胆のうを引っ張り出して吊るしたりと、みんなで作業をしていました。そうすることで動物たちの霊を鎮めてきたのかもしれないですね。

千松●伝統的な猟で、皮から内臓までのすべてを山の恵みとしていただくのであれば、それは基本的にポジティブな営みなんです。食べるためであれば、「獲物がいてくれてよかった」と感謝しながら暮らせますから。ところが駆除の目的は、「いなくなればよい」という排除ですからネガティブですね。それで、獲って肉を食べることが目的の猟よりも生き物の命を奪うことへの罪悪感みたいなものは強いのもかもしれません。多分、そこが根本的に違って、精神面の負荷が大きくなるのかな、という気はします。

岡●「いただきます」は命をいただく感謝の言葉と言われます。でも、いま駆除に携わる人たちが獲るイノシシやシカのほとんどは廃棄されています。二ホンシカの利用は、国全体で10パーセントほどでしょうか。

松浦●日本はそうですね。イギリスだと捕獲個体の97パーセントくらいは食肉利用しています。目的が個体数調整であれ、獲ったからには食べるというのが当たり前なんです。海外の人に「日本ではシカを獲ってもほとんど捨てられてしまう」と言うと、「なぜそんなクレイジーなことをする？」と言われます。

岡●シカやイノシシは、圧倒的に身近な食材です。裏山にいたわけだから。その恵みをいただかないのはもったいないですね。むしろ、日本でもシカの肉を食べていました。そ



◎千松信也さんの本

『ぼくは猟師になった』(新潮文庫)



* Key Words 止め刺し

罾で捕らえた動物のいのちを絶つこと。銃で射殺したり、電気ショックで感電死させる方法などがある。千松さんは、こん棒で殴って失神させたあと、心臓周辺の大動脈を切って絶命させる伝統的な方法で行っている。写真は、千松さんが仕留めたイノシシの頭骨。



千松さんが獲ったイノシシの肉。おいしくいただきました。



獲物がよく通るけもの道を見きわめて、くくり罠を仕掛ける。獲物の目線で自然をみつめ、獲物が脚を置きそうな場所を選ぶ(左)。ワイヤーの輪のまん中の糸を踏むとピンがはずれ、バネで輪が閉じて脚をくくる(右)。

れが、明治時代から先の大戦にかけての50年ぐらいのあいだにシカの数が急減し、気づいたらまわりにほとんどシカがいなくなりました。それで戦後、雌ジカを保護し始めたんです(10ページ参照)。その時期にシカ肉の食文化が消えて、食べ方がわからなくなりました。もともと日本では庶民の食材だったのが、いまは西欧の影響でジビエという高価な肉になった。そのあたりに、シカ肉の利用が進まない理由のひとつがありそうです。

千松 ● 駆除目的だけで報奨金*がでると、柴にお金を稼ぐために偏った獲り方になる可能性もあるように思います。頭数を減らしたい民家の近くにはシカがいっぱいいるのに、獲りやすい場所のシカだけを追ったりする。それで本当に自然界のバランスがうまくいくのか心配です。自発的に獲って食う、自分で殺して食べることが完結している個人の猟師が各地の山里に点在して暮らすほうが、あるいはバランスが取れるのではないのでしょうか。

松浦 ● それが理想形だとは思いますが。

岡 ● よりよい仕組み、動物との向き合い方を、常に考え続けていく必要がありますね。

千松 ● 野生動物とどうつきあうて生きるのか、しっかりとしたビジョンを持つ必要があると思うんです。京都でも、たとえば東山はイノシシを獲ったほうがいいのに、鳥獣保護区に指定されていて、まるでイノシシパラダイスのようになっている。イノシシやシカが増えたことで数が減って暮らしにくくなる生きものもたくさんいるわけで、その辺も含めてしっかり考える必要があると思います。

僕はどちらかというと動物の側にいたいと思っているの、シカやイノシシが「害獣」と悪者扱いされている構図はとても不愉快に思います。山や森の構造を散々いじってきたのは人間なわけで、人里近くにドングリの木がたくさんあり、奥山にスギやヒノキしかなければ、シカやイノシシに集まると人間が指示したようなものでしょう。それで、獲って食べるのであればいいのですが、ただ「害獣」として駆除するのはどうなんでしょうか。

岡 ● 猟師は山が与えてくれる恵みに対して「ありがとう」と感謝の念を持って獲物を持てますが、いまの駆除ではその気持ちを持ってない。そこが一番の問題かもしれませんね。

千松 ● 人から頼まれて本当は殺したくないのに殺してるみたいな形になっているとしたら、心理的プレッシャーは大きいと思います。

松浦 ● 食べて喜んでくれる人がいるとか、食べて美味しいと思える自分がいることが、おそらく狩猟の本質なので、駆除ではなく、改めて資源として捉え直す必要がありますね。

岡 ● とはいえ、捕獲個体の肉の流通は、なかなか難しいそうです。流通量を増やすには安定した供給が必要でしょう。

松浦 ● 野生動物なので安定供給は求めるものではないと思うんですね。それは海外もそうですが、やはり旬の時期に食べる食材なんです。手に入ったら食べる。日本人は魚で慣れていて、サケやサンマは旬の時期には生で流通しますが、それ以外は冷凍だったりします。食材に対する慣れの問題かなと思います。

千松 ● 日本では野菜も含めて、均質なものを



千松信也さんの本

『自分の力で肉を獲る』
(旬報社)

* Key Words 報奨金

野生動物による農作物、森林への被害に対しては、都道府県の管理計画に合わせて各市町村が地域にあった被害防止計画を策定している。侵入防止柵設置などの対策を取るとともに、有害鳥獣の駆除に対して、捕獲個体の買い上げや食肉加工への補助が行われている。買い上げ金額は地方自治体によって数千円から数万円まで差がある。



岡 輝樹 (おか てるき)

1964年滋賀県生れ。1992年東京都立大学理学研究科修了。博士(理学)。1995年JICA長期専門家としてインドネシアに渡り類人猿の社会進化を研究。1998年から日本学術振興会COE特別研究員として京都大学霊長類研究所に在籍。2001年森林総合研究所東北支所主任研究官。この年のツキノワグマ大量出没を機に野生動物管理学に携わる。鳥獣生態研究室長、野生動物研究領域長を経て現在、四国支所長。動物生態学的視点に加え環境経済学、社会心理学的観点から野生動物による被害管理を研究。



「オスジカが角を研いだ痕、イノシシが泥浴びした痕……森のあちこちで動物たちの息づかいを感じる。確かに彼らも生きている。害獣と呼ばれるマイナスの存在をプラスにするためにできることを探したい。」

巻頭●対談

よりよい仕組み、動物との向き合い方を、常に考え続けていく必要がありますね。

求める傾向が強すぎるかもしれないですね。曲がったニンジンには売らないとか、見た目がきれいでおなじようなものばかりを商品化してるとか。そうした傾向は猟をしている人間の中にもあると思います。獲物の肉質ばかり追求するみたいなの。たとえば、イノシシだったらよく脂ののった雌しか狙わないとか。

松浦 ●野生動物は、性別も年齢も違うし、季節によって体の状態も全然違うわけで。それを一緒に均一化して売るのはできません。そういうバリエーションを楽しもうと思わないと、シカ肉を楽しんで食べられない。

千松 ●その通りです。美味しくない時期に獲れたり、獲った獲物がたまたま健康状態が悪くて痩せていたとか、そういうアタリハズレがあるのが、野生の生き物の肉なわけ。それはもう割り切って食べるべきものだと思うんです。「今年の力モは脂のつてねえなあ」なんて言いながら、そのこと自体も楽しんで旬を過ごすのが野生動物を食う文化なのだと思います。

松浦 ●日々の食べ物としてみれば、殺し方にも気を遣いますよね。罽獵であれば頻繁に見回りをして早くみつめて仕留めるようにするし、銃の場合もちろん、一発で苦しまずに殺すことを考える。苦しませないほうが肉質がいいので、すごく配慮するわけです。

千松 ●アニマルウェルフェアの観点からいうと、ヨーロッパではロブスターを生きたまま茹でるのも禁止された国がありますね。くくり罽獵は日本では有効な狩猟法として認められていますが、イギリスでは禁止されています。

岡 ●動物への配慮に関する日欧の思想の違いは、野生動物の存在を含めたそれぞれの地域文化を反映しているのでしょうかね。

松浦 ●現代は、距離が遠すぎるんですかね。人間と野生動物との……。

岡 ●実際には街中にイノシシが出てきたり、物理的な距離は近くなってるんですけどね。

千松 ●物理的な距離は近いのですが、関わりが薄くなって、どうやら一緒に暮らしているという感覚がなくなってます。現れるし、ニワトリを飼えばキツネやタヌキ、ヘビが、ミツバチを飼えばスズメバチやクマがやってきます。そうした暮らしをしていれば、必ず野生動物の側からちよっかいを出してくる。柵を何度つくり替えてもすぐに破られたり知恵比べのように守ったり、やられたり。

むかしの日本の暮らしというのは、野生動物も獲るし、逆に野生動物に狙われる営みをしていたので、あれほどたくさんタヌキやキツネの昔話が生まれたのだと思います。それがいまは、じつはすぐそこにいるのに、近所のじいちゃんばあちゃんと話していても、「こころはキツネなんかおらんやろう」「いや、なんぼでもおるやん」みたいなことになる。動物との距離という点では、田舎に住みながら、山と関わりずに完結できる現代の暮らしというのが大きいのでしょうかね。

岡 ●野生動物は加害者、というのは人と動物との距離が変わった結果なのでしょう。自然の恵みが見えにくい現代の生活と動物とのほどよい距離感をもう一度見つけたいですね。」

『千松信也さんの本』



『けもの道の歩き方』
(リトルモア)

